

日本語学習者の声 ～標準語から始めた留学生が関西弁の世界に飛び込んでみた～

外食業分野で特定技能の受け入れにより、外国人就労者の雇用が拡大され、それに伴い外国人就労者より「方言(関西弁)を教えてほしい。」という授業内容の要望が増えて参りました。

外国人が日本語を学ぶ時、必ず標準語から勉強を始めます。そして、就労や生活等を通じて住んでいる地域の方言にも慣れ親しんでいく…というのが自然な流れです。

今回は実際に、関西弁と無縁の環境から、関西へ移り住み、関西弁の世界に飛び込んだベトナム人留学生・Yさんの経験談と所感をご紹介します。

— はじめまして。Yと申します。私は母国での学習を含め、日本語とは計5年ほど付き合っており、その内の4年間、日本に滞在して学んでいます。最初は埼玉の日本語学校に留学していたため、勉強以外の生活面でもすべて標準語だけの環境でした。

日本語学校で目標だった JLPT の N1 を取得し、大学進学のため、2年前に関西へ引っ越してきました。関西弁は、アニメ・漫才・SNS などの影響で、私たち日本語学習者の間でも有名な方言の一つです。「～やろ」「おおきに」「あかん」などの特徴的な表現は、私自身も耳にしたことがあったので、初めから何となく意味が分かりました。しかし、「～せなあかん」と「～したらあかん」の違いなど、細かい表現の聞き取りは最初、難しかったです。

また、アクセントやイントネーションについては、実際に関西で暮らしてみて、初めて気が付くことばかりでした。例えば、「ありがとう。」と言う時でも、標準語と関西弁では少し違って、関西弁は「ありがとお～」と、音が伸びるように聞こえます。また、関西弁では、1音目が高く発音される傾向があります。例えば、「きのう」は「き」がいちばん高く、または「みつつ」、「よつつ」といった小さい「っ」が入っている言葉には、「っ」に比べて「み」や「よ」が高く発音されるような気がします。

私は関西に移り住んだ直後からアルバイトを始めました。店長、日本人スタッフ、お客様は、ほとんど関西弁で話します。アルバイトは埼玉で経験していたし、すでにN1を取得していたので、仕事の言葉は特に問題ありませんでしたが、例のような違いにとまどい、聞き取りに苦労しました。特に発音は、アクセントが少し違うだけで、全く異なる言葉のように聞こえます。それでも私は関西弁のシャワーにさらされることにより、2年経った今、ようやく問題なく関西弁が聞き取れるようになりました。

私自身、話す時は今も標準語を使います。ところが大学の留学生仲間を見ると、驚くことにまるで関西人のように関西弁を話す人が数多くいます。関西在住歴は人それぞれですが、アルバイトの他にも、サークル活動やSNSなどを通じて日常的に日本人との交流が多い人ほど、関西弁に染まっているようです。私の場合、アルバイト以外であまり日本人との交流がありませんが、バイト先の皆さんが優しくフォローしてくださったおかげで、嫌な思いをすることなく、関西弁を受け入れることができました。

方言を理解することは、生活の便利さだけでなく、その方言を話す方々と心の距離が近くなることにも有効だと感じます。ですから、日本で働く外国人の皆さんには、方言を聞き取れるようになることをお勧めしたいです。しかし、それには外国人自身の努力だけでなく、周りの日本人の方々の協力も必要不可欠です。関西弁の世界にいれば少しずつ聞き取れるようになるはずなので、それまで温かく見守って、やさしい日本語などで協力していただけると、必ず良い結果につながると思います。—

株式会社 Futaba (ORA 賛助会員社)

代表取締役 国定 三恵 (ORA 外国人雇用促進部門会 業務委員)

就労外国人向け企業出張研修や技能実習生の生活指導を含めたトータルサポート、日本人社員向け研修で多数の実績を収めている。あらゆる国の学習者と触れ合っていく中で、お互いが相手の価値観を理解し、認め合うことが大切だと感じ、共に笑い(共笑)、共に成長し(共育)、共に人生を楽しめる(共楽)、多文化共生社会を目指す。その原点に立ち、現在は日本在住の外国人の方々へ言語指導だけでなく、日本の文化、慣習、ビジネスマナーから日常の生活指導まで幅広いサポートを実施している。

